

## 総論

# 化学物質との向き合い方を考える

1. 発達障害増加の原因—農薬や環境ホルモンなど有害化学物質の影響—  
木村—黒田 純子
2. 大気汚染物質が人びとのくらしに及ぼす影響  
高野 裕久
3. 有機フッ素化合物 (PFAS) の影響と向き合うために  
原田 浩二

私たちの身近な生活環境の中には、様々な化学物質があります。日本国内で使用されている化学物質はおよそ 10 万種類を超えるといわれており、それらは食品、衣料品、家電製品、化粧品、洗剤、医薬品などの多くの製品に使用され、生活と深く関わりを持っています。

こうした化学物質は様々な効果がある一方で、化学物質過敏症と呼ばれる症状を引き起こす原因として多くの人々に負の影響を与えています。また人々と同様に大気・森林・海洋・河川・湖沼等といった自然環境にも大きな影響を与えています。古くは、1962 年に出版されたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』において、人間が生み出した化学物質が生物に有害な影響を及ぼすことが指摘されてきました。環境中に排出された化学物質の中には、大気汚染や水質汚濁の原因となる物質があることや、土壌に蓄積することによって地下水等を通じて拡散し、生態系や人々の健康に影響を及ぼす事態が起こっていることは周知の通りです。

歴史が物語っているように、水俣病などをはじめとした産業公害や、生活排水

による水質汚濁、自動車等の排気ガスによる大気汚染、フロン等によるオゾン層の破壊、また高度経済成長期に起こった毒性の強い DDT (ジクロロジフェニルトリクロロエタンの略で、有機塩素系の殺虫剤・農薬) などが田にまかれ、本来、田に生息するフナやドジョウといった様々な生物が田から消えていったことなど、枚挙に暇がありません。

科学技術の発達により、多くの化学物質が生み出され、人々はその恩恵を受けてきました。一方でその溢れる化学物質を、私たちは直接目で見ることにはできません。ゆえに、的確に情報を捉えて理解し、日々の生活の中で一人一人が取り組めることを継続して行っていくことが大事だと考えます。

総論では、こうした化学物質との向き合い方について多様な論点を提示して述べて頂きました。本号を通じて私たちの生活に大きな影響を与えている化学物質との接し方や未来に向けての行動について考えていく一助になれば幸いです。

(本研究所研究員 片上 敏喜)